

も忘れかけていたところに、返信用のハガキで故国の父から便りが届いた。文面の内容は、家族一同無事であること、東京のおばが本土空襲で家屋を失い私の実家に一時身を寄せていること等を知らせるとともに、私には抑留中、健康に注意し、無事に帰国するよう祈っているという内容であった。私はこのハガキを手にしたとき、何回となく読み続けた。ついに万感胸に迫り周囲の仲間の前で涙しながら泣いた。

とにかく故国のみんなに、私が生きていることの証拠のハガキだ。あのとき父に差し出していなかったらどうであつたらう。故国の親族は私の生存もわからず、心配し続けていたことであろうと思うと、本当によかつたと思う。抑留中にわずか四枚しか同種のハガキをもらえなかったが、全部父あてに差し出した。しかし返信を手にしたのは一番初めに出したハガキだけであつた。

家族を失つた抑留残酷記

北海道 石川 朝雄

二列横隊に並び、両手を上げソ連下士官に武装解除を受けた。体に着けていた帯剣や鉄帽、三八式歩兵銃等々一切を、ソ連兵が乗つて来たトラックに積まされ、その後身体検査だ。全員男泣きに泣き、涙をぬぐつてもぬぐつても次から次へと押さえることができなかった。このとき万年筆や時計をとられた者もいたが、自分分は背が低かつたので後方の方にいた。やにわに時計は腹の中に隠したので、万年筆はとられたが時計だけはとられずに済んだ。

このとき驚いたことにソ連の将校（少尉）が持っていた樺太の地図だが、その明細なこと、山の火防線、道路まではつきり記入された地図を持っていたことだ。いかにスパイ行為が戦前から行われていたことか、このこと一つでわかつたほどだ。

私たちは第八師団樺太衛生隊第三中隊、中隊長越智一三中尉の第三小隊付衛生兵であつたが、昭和二十年八月二十日付にて中隊医務室付となり、今日樺太真岡町にソ連軍上陸、彼我の戦いとなつたのでその援護を目的として、逢坂にて中隊医務室を開設、死傷者の治療をしていたが、八月二十三日十時ごろここも危険とのことで後退し、師団司令部のある小沼に行くため道路を行軍しているところを後方よりトラックに乗つて来た上敷香四二部隊三大隊の石黒大隊副官（藤田大隊長は二十二日左肩貫通銃創で後方に護送）がかわつて指揮をとつていた。この副官の命令で武装解除となつた。

この日は正午で爆撃もなくなり、夕暮れなのでこの晩は上豊栄の朝日館という小さな宿舎にキューキュー詰め、疊二疊に五人と思つたが横になり、互いちがい一夜を明かし、翌朝ソ連の歩哨つきでトラックに乗せられ、留多加小学校に入れられ、夜はサーチライトで歩哨つきで監視され、こうして抑留生活が始まつた。

ここに約一か月、九月末ごろ持ち物全部持つて校庭に整列とのことで整列したら、中隊長は、「これから大泊に向かつて行軍する」ということで大泊へ向かつて行軍。途中一夜は露営で、二日目の夕方大泊町の旭ヶ丘女学校の講堂に入れられた。

ここには日本兵が大勢入つていた。ここもびっしり、横になつて寝ることも窮屈な状態であつた。ここでは大泊港の使役に出たりして生活した。この間初めて黒パンの配給を受けたが、酸っぱくて食べられず捨てた。大泊で約二か月いたが、使役は港湾作業で米やら麦粉を軍足にビッチリ入れてちようどまたの下に入れて帰り、これを常食としていた。

この講堂に約二千人くらいいたと思うが、ある晩一人の軍曹が教壇に立つて何か伝達事項を話していた。このとき教壇に腰かけて、軍曹に銃口を向けた一人のソ連兵がマンドリン（歩兵銃で七十二発の弾が入っていると聞いていたがこれで我が軍は悩まされた）をいじつていたが、そのうち一発が暴発してちようど立つて話しているこの軍曹の右腹部から肺に達する盲管銃

創で倒れた。早速講堂の中間ごろにいた我々樺太衛生隊のところで急造の手術台をつくり（と言っても戸板で）軍医の執刀で手術をしたが、その場で絶命してしまった。全く残念であった。

秋風も身に感ずるようになった十月二十五日、この講堂の全日本軍人は船で移動するという情報が二日前に入った。我々は港の使役で前述のごとく若干の貯えがあった。それを二十五日早朝に起床して空き家の民家から無断借用して来た釜で分隊員の分を何回も炊き、握り飯にして雑のうに一人二日分くらいずつと、水筒に水をいっぱい入れて待機した。

間違はなく午前中整列がかかり大泊港に向かって行進した。波止場に着いてみたら日本兵四千人、警察官千人計五千人を乗船させるとのこと、この五千人を乗船させるのに午前中から夕暮れまでかかっているのである。自分たちは割合早く乗船したが、最後が警察官で船上から見ると、はつきり軍人は緑色の服、警察官の服は黒一色で、何か変な組み合わせと思ったものである。

船はソ連の輸送船で、船上にこの五千人が全部が乗ったのだから相当大きな船だ。この日快晴でのどがかわいて大変であったが、水筒の水は大事に少しずつ飲むことに各分隊員申し合わせていた。

五千人を乗せるのに一日もかかっているこの理由は、日本軍であれば縦隊なり横隊なりにして番号をかけてそれで何人とすぐわかるのだが、ソ連兵（下士官も含む）は五人ずつ一列にして縦隊、それを自分で、アラーズ（一のこと）ドア（二）テリ（三）というふうに数えて歩き、最後までゆけばよい方で、途中まで行ってまた戻り、最初からやりなおし、こんなことを再三再四といったぐあいだから大変な時間がかかるのであった。

そして夕日が西に沈むころようやく大泊港を出航し、この夜は亜庭湾の西能登呂岬の北東に知志谷という天然の港がある、ここに投錨した。そして盛んに陸上と船と探照灯で暗号を送受していた。

人のよさそうなソ連の歩哨がザフトウ（明日）ヤボンスキー（日本）ソルダート（兵隊）ヤボンダモイ（日

本に帰る）等手まね足まねで話していた。

兵隊たちはあす日本に帰れるのだということで一層にぎやかになったが、自分は半信半疑でいた。自分はあすこの船が宗谷海峡を西に進み、それから南下するか北上するかで行き先が大体わかると一人考えて眠りに入った。

夜が明けて午前八時、船は錨を上げて知志谷港を出航、南下し宗谷海峡を西へ西へと進む。内地出身の兵たちは日本へ帰れると喜んでゐる。海峡を出たころ船は船体は右舷に舵を切った。そしてどんどん北上を始めた。それでも帰れると言っている者もいる。そして海馬島を左に見て宗仁、本闘、我が故郷遠節の沖をどんどん北へ進み真岡町の沖まで来たとき船は左舷に舵を切った。そして沿海州に向かってどんどん進んだ。ここで初めて自分は内地出身の戦友たちに説明した。「これは日本に帰るのではない、おそろくソ連本土に行くだろう」と、これを聞いた内地出身の戦友たちもがっかりしていた。

この日も快晴で水筒の水はみな空になっていた。そ

こで輸送船だから甲板上細いのや太いパイプやら数多く立っている。外気温が高くパイプの中は低温なので、そこに発生する水蒸気水滴となって落ちる。そこに水筒の口をあてていっぱいになれば分隊に持ち帰って、一個分隊で分けて飲むということにした。宗谷海峡を北に向かう前、すなわち西に向かっているときに、それまで帯刀を許されていた将校は全員刀を取り上げられた。

また気のよさそうなソ連の歩哨に聞いてみた「この船はどこへ行くのか」もちろんソ連語はわかっていない、手まねである。ところが彼は「ヤポンスキーソルダート（日本の兵隊）ヤポングモイニヤート（日本に帰らない）シベリアドラワビリビリ（シベリアで大木を切る）ソルダート（日本兵）オッペイウメライ（やせてだんだん弱り死ぬんだ）」という意味を手まね足まねで言うのである。私は「鉄のカーテン」というところに来たのである。命のある限り働かされて最後は銃殺される」と覚悟した。

そして港に着いた。ここでは下船である。ここでも

大分時間がかかった（後でポートワニという港であることがわかった）。そしてこの夜は下船して三百メートルくらい歩いての線路ふちで夜営することになり、背のうから天幕をはずしてそれに身をくるみ寝ることにしたが、シベリアの十月二十六日である。快晴の日の夜である。星がきれいに見えるが、頭の中で遠節の人々は、家族は、また日本はどうなるんだろうか、いろいろなことを考えて寒いなかにも眠つたらしい。大泊で前々日つくった握り飯は雑のうにはもう一つもない。朝食の時間なのに何の支給される気配もない。何もせずにいるうちに百メートルくらい前方に貨物列車が停まるのが見えた。

「整列」の小隊長の号令で背のうを背負って整列した。何かその列車に先頭部隊が乗っている様子が見えた。そして前へ前へと進んだが、自分たちのはるか前で停止し列車は方向（北か南か）はわからないが発車した。後にも列車が入ったが、これにも我々は乗車でさず、その夜またここで夜営することになり、腹が減ってくる。何か食べたい、しかし何もない。水はあつ

たように思う。水ばかり飲んで、その夜も天幕にくるまって寒さを我慢しながらマンジリともせぬうちに夜が明けた。昨日と同じ、朝、列車が入って来た。今度は乗れた。有蓋車である。びっしり詰めて我が小隊全員は乗ったと思う。動き出してから三時間か四時間か思い出せないが、列車はまるで線路というのか未完成線路とでもいうのか、前後左右に動くことはなはだし。でも停車し、「下車」の号令で下車し、五列縦隊（ソ連は五人ずつ並ばせる）で前進し、ここから十分くらいのところまで停止した。見ると四方を高さ二メートル直径十センチくらいの丸棒というか、びっしり立てて、入り口が一か所で角に二か所に望楼（高さ十メートルくらい）があり、歩哨がマンドリン（銃）を持って立っていて、四方を見ているのである。すなわち我々の収容所である。入り口が営門になって、この営門をまたまた数えられて入ったが、きょうか昨日まで独軍の捕虜が入っていたということを耳にした。出た数より入った我が軍の兵の数が多いのだから、宿舎には入りきれない。そこで屋根裏まで入れられ、運悪く自分の

班はこの屋根裏であつた。よく屋根裏に何十人も入れるものだなあと考え、「必ず屋根裏が落ちるぞう」等と考えていたが、落ちなかった。真つ暗で何も見えない。とにかく腹が減つて動かない。戦友と言葉を交わすのもたいぎである。そうしているうちにだいたい日も暮れてきた。だれかが「パンが上がるとよ」という声が下から聞こえてきた。(上がるといふのは支給されるという意味)、「各部隊から一人ずつパン受領に出よ」との達しがあつたので、だれかが受領に行つただろうと思つていた。たしかに受領に行つて来て野外で分けて一人分ずつ配給され、ようやく三日目の晩に腹に物が入つた、このときのパンは大泊で支給されたパンと同じ黒パンだがうまいと思つて食つた。しかし満腹どころか胃袋の片すみに少し入つたくらいであつた。そうしているうちにだれかが灯を持って来た。聞くと歩哨と交渉したのか缶詰の空き缶に列車のオイルを入れウエスに火をつけての灯だ。さあ、たまつたものではない。火が半分燃える、黒煙が半分だ。それでもみな疲れて寝についたが、何だか体のながかモゾモ

ゾする。それが一匹や二匹ではなく何十匹と言ってもよいくらいだ。そうつと手を体の中に入れて一匹つかまえてみたらシラミではない、それより少々大きい。つぶして臭いをかいでみたら油くさい。何というものかわからないが、体中かゆくなる。この夜はこの虫に悩まされ、まんじりともしないうちに朝になつてしまつた。また朝のパンの支給と今度はスープの支給だといつて、各自持つてゐる飯盒を分隊員のを集めて支給を受けたが、塩ニシンの塩汁で、これは最後まで太平洋汁と名づけた。魚の形など全然なく、身も骨も溶けて味だけ、ニシンの塩汁だけだなあと感ずるだけだ。朝食というほどの量ではないが、とにかく終わつて、作業に出るから外に集合とのことで集合したら、二人一組になりノコとタポール(日本の金時まさかり)を与えられ、小隊長とソ連の歩哨と作業監督がついて十五分くらいの裏山で目の高さで直径十五センチくらいの丸太切りを始めよとのこと。「山のことなら経験済みだ、ただ日本の鋸は一人で切るがソ連の鋸は二人でお互い押して切るのだ」ソ連は何仕事にもノルマ(作

作業量というか)があつて、このノルマを完成しないとどんな遅くなつても宿舎には帰れない。だから作業の監督は、「ノルマニヤット、ダモイニヤット」(作業量を完成しないと宿舎に帰れない)「ダモイニヤット、クーシチャニヤット、スバーチニヤット、プストラー、プストラー」(宿舎に帰れないと食事の支給がない、そして寝られない、だから早く早く働け)と言つて我々に気合いをかけるわけである。このとき歩哨が階級が上級だつたり言葉の達者なすなわち押しの強い人は作業監督と話し合つても勝つ方で、作業監督もノルマ達成しなくても我々を帰すのであるが、反対だつたら八時間労働なんて関係なくノルマ達成まで働かされ、深夜作業でえらい目に遭うのである。

丸太切りも一段落して今度は丸太の皮むき、収容所までの運搬(結局収容所の収容人員が多いものだから建物を建てる丸太切り作業になつたわけである)そして鋸とタポールとで建物が建つのである。作業指導員の言うとおりで丸太で収容所を建て天井はやはり丸太を並べるので落ちないはずだ。屋根は主に落葉樹ばかり

の太い木を四十センチくらいの長さに切り、幅二十センチくらいのを台に乗せ、刃が三十センチくらいのついた四メートルくらいの根元につけ、先の方で四人(二人は押す、二人は棒の先に綱をつけて引張る)くらいで、厚さは桎の厚さに一回一回引つ張るとちょうどよい桎になる。これを屋根に張つて、釘は古いワイヤをほいて真つ直ぐに伸ばし、古いタポールの刃を上にし、この伸ばしたワイヤを斜めにタポールの上に置き、上から金槌でたたき(長さ三センチくらい)と一本の釘が出来上がる。これで桎と釘ができるといふことになる。次に丸太を積み上げた家の中から、外壁はこれも落葉の木を長さ七十センチ、幅二センチ、厚さ二センチくらいに割り、この壁に釘で打ちつけ、それに粘土質の土を打ちつけ表面を平たくならし、乾燥したころ石灰を水で溶かして白くなったのはけで塗る。そうして内外壁ができ、部屋のうちには両側に上下二人ずつ寝る寝台をつくつて出来上がるということになる。

そうしているうちに何日も風呂にも入っていないの

で、シラミがふえて、昼休み（一時間）など火をどんなにたいて裸になってシャツを火にあぶると、血を吸ってコロコロと太ったシラミがボロボロと火の中に落ちてゆく。よくシャツをほろつたものだ。

食事も入所して炊事場もできてから主にコウリヤン飯とパンが三百五十グラム、それに前記の太平洋汁（主に塩ニシンか塩マスであった）。これではとても栄養カロリー等とれるものではない。腹が減ってたまらない日の連続であった。従って持っているもので万年筆や時計（武装解除のとき取られなかった人）飯盒、最後に毛布まで持ち出して地方のソ連人と食べ物を交換した者はほとんどであったと思う。

建物もできて次には大森林の伐採、丸太切りをやらされた。昼なお暗きとはこのことか。上を見ても空が見えないくらい、感心したのは木の枝にコケがぶら下がっていることだ。これはあのシベリアの風の強いところで、木の枝のコケがぶら下がっていることだ、どんな強い風も何の影響もないということ、そして長さが十二尺丸太七、八本くらいとれたと思うくらい長い。

それはそれは見事な大森林だ。二人一組になって丸太切りを翌年の二月ころまで実施したと思う。日本のようにトビ、ドットコ等あるでなし、切った丸太は長さ二メートル末口四センチくらいの細い棒で、二人で切ったところに積んでおくのである。とにかく森林資源は大したものであった。とにかく重労働であった。このころ戦友が重労働と食糧不足で栄養失調となり多く死んだ。

三月に入って今度は台車にバラス積み作業をさせられた。ところがソ連のスコップというのは柄の握るところがない。丸棒のみである。従ってスコップに入ったバラスが台車に投げ入れる前に半分くらい落ちてしまふから、ノルマが達成されず、これには大変な目に遭った。ソ連は朝の温度が零下三十八度以下は作業休止となる。ただし作業に出たら、ノルマが達成されないと深夜までもやらされる。おそらく夜の温度は相当下がっていたと思う。重労働だから疲労困ぱい腹が減ってやりきれないが、さて作業もようやく終わって帰営に着くのだが、ようやく歩いているというのが実態

で、小指の先ほどの石につまづいてもすぐ転ぶし、軍隊の防寒帽であつたが耳、鼻等何十回凍らしたかわからない。お互い戦友同士が注意し合うのだが、耳のたれを下げるなど忘れて行進するので、白くなつてわかり注意する、とにかく半分意識がなくなっているのだから、前列者によく着いて歩いているという有様だから、やむを得ない。精神力のみである。

次に五月に入つてからだと思うが、伐木した根株を取り除く作業にかかった。根株の根が何本もあるのを、すっかり土を掘り、一個分隊でロープをつけて、「セーノ」の音頭で「ヨイショウ」と引つ張り、一方で取れなければまた別の方向からと根株を取つて去り、何百ヘクタールというか、畠にしたものだ。

二度目の冬が来た。また丸太切りである。こども大森林、実に感心した。二人一組だが今度は全く素人の相手方。自分は幼いころ父の仕事を見ているから一応の先輩、それに前年の経験もあり大変助かつた。このとき素人同士が倒す方向を間違えて反対方向になり、別の木にひっかかり、ノコを折つてしまった。ソ連と

いう国は器材を非常に大事にする国で、この戦友二人はチヨルマといつて日本で言うならば警察の留置場に一日か二日入れられたと聞いている。我が小隊でないので定かでない。

この春ころから下着の消毒が始められたように記憶している。六平方メートルのところに下着の上下をつるして外から（ドラム缶を横に入れて）火をドンドンたき、室温を高くしてシラミやその幼虫が死ぬ、そういう仕掛けである。それで大方助かつた。だが夜の油虫はどうすることもできず毎夜悩まされたことは続いていた。

春になると草木の芽も生い茂る。腹が減っているので食べれるものは片っぱしから何でも食べた。ヨモギ、イラクサ、アカザ等々、夏にはカンショと樺太で言っていたが、アヤメの花と同じような黄色い花、これは甘味があつて非常においしかった。とにかく昼休みにこれらを掘つて飯盒や缶でゆでて、塩もない、従つて味もないものをよく食べて満腹感を味わつたものであつた。

秋ころに、ある小隊（三十二人ほど）全部が古い落葉樹の根株に生えついたキノコを食って、作業が終わり営門を入ったとたん全員バタバタと倒れた。早速軍医がこの兵隊を近くの病院に送ったが（モンダクトと記憶しているが）二、三人生き残ったきりで後は全員死亡したという。後日収容所でこの死亡した方々の小便を見せられたが、真つ赤な血を薄めた色をしていた。すなわち縦に裂ければキノコは食べられるというので、やってみたら縦に裂けたというのだが、毒キノコであつたわけだ。こんな死に方をした戦友もいるのである。

この夏ごろと思うが、日本新聞というのが発行され、我々の収容所にも届くようになり、共産主義運動が盛んになってきた。オルグといつて共産主義の指導者だ。こういう人たちが来てまず将校のつるし上げから始められた。やり方は、一日が終わって収容所によりやくたどり着き、夕食を終えて自分自分の寝台で休んでいるのに、将校（まず自分たちの小隊長）を真ん中にして、これを兵隊たちが、日本国の原隊にいたとき、我

々兵隊をあらゆる方法で教育すると称していじめたろう等々具体例を一つ一つ挙げて頭を下げさせるというやり方。これに参加しない兵隊には、「お前は何だ、共産主義の思想をしつかり身につけないと帰国できないのだぞ」というふうに実施され、日本に帰れるということがだんだんわかってきたり、作業中の昼食時間、今までは各個ごとに休んでいたのが輪読会と称して一個分隊に一枚より来ない日本新聞を読んで、お互い討論するというふうに一大変化が来た。

あまりつるし上げが激しくなつたので将校は他の収容所にソ連側は移し、各収容所には将校は一人もいなくなつた。従つて今度はお互い戦友同士がつるし上げられるようになった。例えば「今日お前トイレに行つたが普段より時間が長かつたではないか、作業のサポタージュだ」「そんなことでどうする」「自己批判してみろ」というようなことでこのころから何々君ではなく、「同志○○」と「同志」という言葉を使うようになった。とにかく共産主義一色に変わってしまった、これに賛同しない者は反動分子として毎晩つるし上げら

れるので、どうしても主義者になりきるか、そのふりをするしか仕方がなかったものである。

そして毎月ソ連の医者の身体検査があり、お尻の肉をつまんでピンと張っているのは、「アジン」（1ということ）「ドワ」（2ということ）「テリー」（3ということ）「オペー」（やせということ）の検査結果を個人別の表に記入され、お尻の肉が薄くたるんでいるのはすなわち栄養失調のオペーにかかっているということになり、このような人から先に掃されるようであった。これedyようやく命があれば掃されるかという考えが浮かぶようになり、シベリアに上陸したとき考えた、「働かされて銃殺される」ということは否定されたのである。

このころから入浴もできるようになった。入浴といっても日本のように浴槽にたっぷりお湯があつて入るのは全く違って、直径二十センチ、高さ十五センチくらいの丸いおけにお湯が一人二杯より使えないのである。従つて最初のお湯で石けんを使う洗いの、頭と体全体、後のお湯で洗い流すという方法をとった。

だから日本のお湯に入ったということとは大変な違いである。多分一週間に一回くらい入れたと思うが、でも入らないよりはよく、それに床屋は日本兵の中に召集前理髪業をしていた者がいたのでこれは以前から行なわれていた。こんなことで衛生面もだんだん充実して来た。

昭和二十三年の春コルホーズ（国営農業）に七十人ほど行くことになり、収容所より歩いて二時間のところまで行き、川幅七、八メートルの川を丸太船で渡るのだが、一回に十人、操船者二人（これは日本兵が前々からここでこの作業をやっていたとのこと、後日わかつたのだが二人とも北海道出身であつた）二人から乗る前に注意を受けた。

「船に乗ったら腰をかがめて船の両舷側に手でつかまること、向こう側に着いてから『上がつてください』と言うから、それまでは絶対に船の中では立つたり動いたりしないでください」十人一組になって若干ものが入っている背のうを背負つて船上の人となり、七十人が七回渡つたことになるが、中に一回一人が向かい

側にまだ着船しないのに立ったため、船はひっくり返りみなずぶぬれ、ここから三十分くらい歩いてコルホーズの収容所に入った。ここは高さ二メートルの柱が二メートル間隔に立っていて、これに横に二十センチメートル間隔でバラ線が横に張ってあるだけ、隣にソ連女性の囚人の収容所があり、バラ線で区切つてあるのみで、バラ線を少々上下すると自由に往来できる。

ここにはソ連の歩哨もおらず、総責任者はナチャニツク（大尉）夫婦とその下に少尉夫婦、パン工場のパン焼き（イワンと言つていた）夫婦と営門に老人と作業監督、四、五人の老人がいるきりで、後は我々日本人捕虜と女性の囚人のみであつた。陸の孤島みたいなところである。（女性の囚人も五十人ほどおつた）。作業は主に馬鈴薯づくりで、あとはキャベツ・ニンジンその他若干の野菜をつくるのが主な作業であり、我々は馬鈴薯づくりの作業であつた。主に馬耕で馬と人とですべてやつていた。女性の囚人とは別々の作業であり、一緒になることはない。作業が終わつてバラ線をくぐつて行つたり来たりもでき、お互いが単語ながら話も

できて今までは違つた生活環境であつた。しかし食糧は前ほどではないが、やはり満腹感ということにはなかつた。春まきが済むと、初め植え始めた方から草とり、土かけ等が始まり、そうしているうちに馬鈴薯も一段落した。

次は牧草刈りが始まつた。日本の鎌と違つて刃の長さが七十センチもあり、それに柄の長さが一メートル七十センチもあつて、それを横に振つて刈るのであるから大変な力が必要であつた。しかし前の収容所ほどではないが、日本新聞の輪読会は昼休み時間にやる程度で、夜のつるし上げはなかつた。この草刈りのノルマがまた大変多くて、いつも定時刻には帰れなかつたが達成できた。

ある休日に宿舍の大掃除をするよう少尉から指示された。自分は上半身裸体で自分の寝台下等掃除し終わり、宿舍の真ん中を金網で水をかけかけ板をきれいにするのに汗を流して一生懸命やっていると、少尉が「イジシュ」（おいで）と言つて戸外に呼び出し「明日からこの宿舍の寮長をやるように」と指示され、その翌

日からは作業に出ないで寮長を務めた。

一か月ほどしたらまた少尉が今度は自分の家へ来て手伝ってくれという。奥さんが妊娠しているので分娩も近いらしい。その翌日からこの少尉の家へ行き部屋掃除やら水くみ、豚一頭の飼育が主な仕事であった。そろそろ秋風が吹くころとなり、我々同志はみな馬鈴薯掘りの作業をしていた。

ある日、少尉が明日山へ行つてフレップをとつて来てくれ、案内人と女性とで行くからというので、翌日奥さんが弁当をつくってくれ、寮の前で待っていると、女の囚人が十人と案内役の老人と自分と一行十二人で付近の沢から入り、山に登り山頂に来たら、あるはあるは一面にフレップ畠のよう。ここで多量にとり昼食を済ませてからまたとり、そろそろ帰ろうということになり、顔をあげて空を見上げたら、今にも雨が降りそうな黒い雲が我が方に向かって迫り来る様相を呈して来た。雨が降るかもしれないということで急ぎ帰路に着いたが、今朝来た沢とは別の沢に下りたらしい。いくら歩いても村に届かない。そのうちに豪雨が降っ

て来た。大きな木もない小さい笹ばかりの沢だ。とうとう夕暮れとなり、歩いているうちにすっかり暗黒の夜になってしまった。案内の老人もとうとうあきらめたのか、今夜はここで野宿しようということになり、雨はますます激しくなる。十二人が車座になり、お互い体と体を密着しその体温で風邪を引かぬようとのことで、その体勢で歌を歌って眠らないことといって、一晩中夜の明けるまで歌い続けた。自分はわかる歌は、*「カチューシャ」*の歌くらいで後は何もわからないが、とにかく眠らないで一夜を明かし、夜明けとともに歩き出した。

雨はやまらず降っている。三十分も歩いたらうか、宿舎が見えた。少尉の家へ行ったら大変心配していた。とにかく寮へ行つて着替えて「今日は一日休みなさい」ということで一日休んだ。もちろん同志一同もこの日は作業休みであった。ただこの豪雨が二、三日間続いたと思う。川が氾濫中の島に放し飼っている馬が流されていないかと、この馬飼ひ担当の兵が一人夜半にそれを守るためにとうとう帰らぬ人となった。この

とき少尉は豪雨のなか二夜だと思ったがずぶぬれになってこの一人の兵を探し求めて川下まで搜索に昼夜当たられたが、とうとう見つからなかった。この姿を見て大きく感ずるものがあつた。そして感謝した。

芋掘りも始まったが、このころ少尉の奥さんも無事男子を出産した。そして何日かたったある日、今度はこの芋をアムール川の支流であつたこの現場のいか所にトラックで運び船で下流の方へ運ぶ受け渡しがあり、この受け渡しの立会人をするように言われ、ここで半月ほどトラックで運ぶ芋の荷渡しの作業であつた。これも終わり農作業の後始末をしているころ少尉はロシヤ革命記念日（十一月七日）が来る、それに僕と一緒にしようということだ。二泊三日、コムソモリスクだつたと思うが、大都会だ、随行した。十五分間実験談を話せというのだ。内容は草刈りのノルマを達成したその作業方法と農作業と、最後にソ連国という国の見たままのことを言えというのであつた。

多分一収容所から一二人ということが集まつていた。自分のコルホーズでは自分一人であつた。会場に

は約二百人くらいの兵がいた。とにかく一日目は自分の出番でなくその晩はえらいご馳走だつた。さあ大変、腹の虫もびっくりしたのでろう。その夜から下痢が激しくなり朝になつてもとまらず困り果てた。自分の出番の直前までトイレに行つて何とか十五分間話せようと考え、いざ自分の出番がきた。十五分間話しているうちにお尻の方もよおして来た。あと五分くらいのところどうとうピンと出始めてしまった。幸い軍袴は下をむすんであるから演壇には支障がない。終つて浴場を探し、理由を話して、すっかり洗ひ袴下も交換してもらつて、軍医に下痢どめをもらつて二泊して無事帰つた。こんな経験我が一生のうちで後にも先にも初めてであつた。そしてこのとき何を言つたか今はすっかり忘却した。

収容所に帰つたら炊事当番三人いるきりで後はだれもない。どうしたと聞いたら、皆他の収容所に移転したとのこと、ここも二、三日中には引き揚げるとのことであつた。

その翌日引き揚げ命令が来てソ連の第一地区、沿海

州の沿岸の収容所に四、五人ずつ残ったのが一緒に列車で全部北上した。

下車したところがコムソモリスクの近く、と言っても一時間くらい離れた郊外の収容所に入れられた。ここでは土木作業だ。十一月の中旬だというのに除雪をしながらの土掘り作業、ツルハシも受けつけない状態だ。

そうしているうちに二月のある晩、急に腹が病んできた。しばらく我慢していたがとまらず、ますます病んでくる。隣の同志が見かねて手配してくれ、軍医が来て、「急性腹膜炎だ、早速手術の必要がある」ということで、早速トラックに自分の持ち物を持って防寒衣を着てトラック上の人となったが、病んで病んでどうしようもない、トラック上で転がっていた。真夜中なので寒さ厳しく零下六十度以上下がっていただろうと思うが、そんなの気にもせず一時間くらいのことだということだが二時間も三時間もかかったような気がした。このときはここで死んでたまるかと一生懸命「南無妙法蓮華經」のお題目を、右腹を押さえ転がり

つつ病院に着くまで唱えた。

ようやく病院に着いたが、入り口から入って着ている物を全部脱ぎ風呂に入り（と言っても前述のごとく桶二杯）入り口と反対側に出口があり、そこより出て白衣を着せられてすぐ手術台の人となった。

早速ソ連医師の執刀で手術にかかったが、こちらも衛生兵で多少手術の心得もある。全身も各部も麻酔をする気配がない。片言でその旨話したが、「ニャット、ニャット」で麻酔はないらしい。独ソ戦で何もかも不足しているんだなと瞬間的にひらめいた。麻酔を打たないで腹を切られるのだと覚悟を決めた。右下腹部を何かで消毒しようだ。そして手と足を寝台に縛りつけて助手の女医さんが看護婦か四、五人手伝っていた。一人は私の顔の汗ふきだ。メスが肉を切るのがジリッ、ジリッと切られるたびに局部の痛さで頭の神経と全身に痛さを感じる。全身汗でびっしょり、顔の汗は一生懸命ふいてくれている、時間は一時間半以上もかかったような気がした。最後は汗も出なくなり脂汗のみであった。終わってとった盲腸を見せてもらった

が、ちょうど親指の第二関節から先の大きさのものであった。

その後経過もよく、十日くらいで退院したと思うが、退院後はまた別な収容所に入れられた。従って日本から行った旧中隊の戦友とは全く一人ぼっちになってしまったのである。

ここでは退院の翌日から作業に出された（ソ連はどんな病人でも三十七度以上の体温がなければ作業は休ませないのである）。

シベリアは夏でも一メートル下は凍土なのに、真冬の二月だ。土工作业でツルハシを上げるのは上げるが、振りおろすとカンといつてはね返ってくる。そのたびに腹の傷口と頭にグァンと響く。このとき日本であつたら退院後ゆつくり休養してから作業に出れるのになあ、捕虜だ仕方がないとあきらめて、午前中どうにか我慢したが、午後にはどうにも我慢ならず、作業監督に話して休ませてもらった。こんな半日労働が一週間くらいも続いたように記憶している。その後ようやく軽作業に変わり、とうとう癒着もなく、あれから四十

六年になるが何ら盲腸について異変がない。

そして六月の末、待ちに待った帰国の報に接した。

有蓋車を二段造りにし、真ん中のドアに小便用樋（とい）を出すだけ。戸をこの樋（とい）の幅だけあけた有蓋車に乗せられ、駅で停まると一時間も二時間も止められ、ナホトカに着くまで十日間くらいもかかったように記憶している。このとき思ったことは、朝日や夕日は草原から草原へと実に見事な雄大な土地だなあと考えた。

それからまたナホトカに十日間くらいいたと思う。そしていよいよ七月十五日、日本船が来ると聞きうれしかった。十五日の朝持ち物を持って型通りの検査を受けたが簡単なものであった。そして日の丸の旗を立てた日本船そして日本の船員を見たとき、涙が出て来てどうすることもできなかった。

相かわらず五人ずつ縦隊に並んで乗船を待ったが、このとき名前を呼ばれて列から連れて行かれた者がたしか三人いたと思う。この方たちは再度後方に送られて作業をさせられたとか、それは共產主義者として未

だ未熟だとか後に聞かされたが、真偽のほどはわからない。

とにかく一人一人名前を呼ばれて日本船の舷をまたぐまで後髪を引かれる思いで、舷をまたぎ船に乗り移って、初めて安堵したものだ。

そして船員諸士に深々と頭を下げた。船員も「長い間ご苦勞さまでした」と一人一人に頭を下げていた。

これでもうやく四年間の留置生活ともお別れだと思うと、何かしらわけのわからぬ涙が込み上げてきて抑えられなかった。

ナホトカを出帆したのは十五日夕方だったと思うが、夜半ごろまで南下したが、日本海に低気圧が北上しているのナホトカに引き返すということで船は北上した。ナホトカで何日間か停泊していたのだろうか、再び出港。七月二十日朝方「日本が見えたぞう」の聲に皆一勢に船上に出て、「鉄のカーテンのソ連で働かされて銃殺される」と考えていたのが我が日本に帰って来たのだ、懐かしく、朝もやの中からうっすらと山が浮かび、だんだん緑色に変化して来た。船員から「何

時何分ごろ舞鶴港に入港します。ただいま何時何分です」と報じられたが、だれも船内に入る者はいない。

だんだん近づいて来る故国を見張っている。みな一人一人感無量のものがあつたろうと思う。

湾口を入ってからややしばらくかかっても港に着かない。随分奥深い湾だなあ、さすが軍港だけあるなあと思った。

やがて上陸が開始され、波止場は出迎えの人々でこったがえしていた。しかし自分が知っている人は一人もいなかった。

シベリア抑留の思い出

新潟県 加藤 新三郎

終戦になる年三月末に日支事変に次いで、二度目の召集で新発田留守隊に虎部隊として七百三十三人が入隊した。間もなく朝鮮羅南へ、次いで鮮清国境の演習のもとに壕を掘って陣地構築中の山中で、八月十七日